シラーと美学

井ノ川　清

シラーの著作の中に Kallias oder über die Schönheit という，一般に「カリアス書簡」と呼ばれているものがある。これは，シラーが友人ケルナーに書き送った，1793年1月25日から同年2月28日にわたる一連の書簡集である。シラーはこの書簡の中で美学論を展開している。それは決して体系的ではないが，その中でかなり集中的にシラーの美学思想が述べられている。以下にシラーの美学論をできるだけ統一的に把握すべく，彼の言説に依拠しつつこれを検討してみよう。

1

シラー美学の問題性は，冒頭で述べられている次の言説に命題的に表われている。

「美の概念を客観的にうち建てて，経験はそれを絶対的に是認するが，その妥当性については経験の保証をいささかも必要としないように，美の概念をまったく先験的(ア・プリオリ)に理性の本性から証明するという困難，これはおよそ克服しがたい困難です。」(S. 161)

シラーは美は経験によって是認されるということをまず認めた上で結論的には美の概念の妥当性を理性の本性からア・プリオリに証明しようとしなければならないのではないかと考える。この態度はカントの影響を強く受けていることが容易に分るであろう。即ち認識論的主観主義といわれているカントの考えを反映しているのである。カントはその認識論において，先天的認識はいかにして可能かということを追求し，人間主体の側の先天

的綜合判断の能力を主張した。それは理性の重視であって，経験とか感性というものをア・プリオリな認識形式で規制しようとした。（つまり時間空間という感性の直観形式と悟性の諸カテゴリーによって。）

しかしシラーはカントに熱中したが，決して完全にカントに同意したわけではない。彼がカントの主観主義を克服しようとしたことは明らかである。それ故シラーはカントと一致することの困難性をこの言説の中で述べているのである。

シラーがカントと一線を画していることは次の言説に表明されている。

「われわれが美なるものを説明する仕方は，まず，客観的かもしくは主観的かのどちらかです。詳しく言えば，感性的＝主観的（バークその他のごとく）であるか，主観的＝合理的（カントのごとく）であるか，合理的＝客観的（バウムガルテン，メンデルスゾーンおよび完全性論者の全群のごとく）であるか，あるいは最後に，感性的＝客観的であるかのいずれかです。」（S. 161）

シラーはこの最後の仕方をとるのである。シラーは合理的ということをきらう。だから彼は「もしも美がその対象の論理的性質を克服するならば，まさにそのゆえに，美はもっとも輝かしく現われる。」（S. 162）と述べる。さらにシラーは考える。美は概念なくして満足を与えるものであるし，また美は概念によらず直接的に認められる，と。シラーは言う。

「美が理論理性においては見出されないということは確かです。なぜなら美は絶対的に概念に依存していないからです。」（S. 165）

では概念によらない美とは何か？シラーは言う。

「美とは，それゆえ，現象における自由に他なりません。」（S. 167）

ここでシラーは自由をどのように考えているかをみてみよう。シラーは，実践理性が或る自然的存在者を観照するとき，その自然的存在者が自己によって規定されていることを発見するならば，理性はこの自然的存在者に自由を認めるのだ，という。しかしこの場合の自由は，理性が対象へ貸し

与えたものにすぎない。と言うのは超感性的なもの以外の何物も自由ではありえず，自由そのものは感性の世界には決して入り込みえないからである，とシラーは考える。重要なことは，或る対象は自由であるように見えればよいのであって実際に自由なのではない，それは単なる現象における自由，もしくは，現象における自律なのである，とシラーは言うのである。ここで言われている自由はいかにも主観的なものである。しかしシラーは自由をさらに論ずる。

2

さて美の原理を理性から主観的に導き出すということだけで満足してはならないであろう。客観に対してこの原理の適用を可能にする或るものが，客観そのものの中に見出されなければならない。シラーは考える。美は客観的な性質をもつものであるということを，充分に証明することが重要である，と。美の主観的原理がいかにして客観的原理に移されるのかということが問題なのである。この追求は「自由」の問題を引き続いて検討することによってなされる。

「自由の概念は理論理性の中にはまったく存在せず，実践理性においてのみ自律がすべてに優先する。」(S. 167)

「単なる形式のみに従って自分を規定することのできる意志は，自由と呼ばれるのですから，自己自身によってのみ規定されていると見える感性界における形式は，自由の表現なのです。」(S. 167)

このようにシラーは，自由が単に実践理性の側に存するのみでなく，感性界にも存する，と考える。この点は極めて重要な点なのであって，たんなる主観主義から客観的原理の探究へと移るキー・ポイントなのである。シラーは言う。

「それゆえ，現象における自由とは，それが直観において自己を開示する限り，物における自己規定に他なりません。」(S. 167)

この言説は自由が客観世界に存するということを語っている。

「われわれが対象を美的であると判断する場合には，われわれは，それが自己自らによってあるところのものであるかどうかを知ろうとするだけです。」（S. 168）

このように理論理性は感性界において「自由」に出会うということは望めないのである。シラーは言う。自己自らあらわになるような形式は美である。己れ自らあらわになるということは，概念の助力なしに自らをあらわにするということである，と。

「それゆえ，われわれは，なんらの説明をも要しない，あるいはまた，概念なくしてあらわである形式は美であると言うことができます。」（S. 169）

次にシラーは「合規則性」はそれの発生の源である概念をわれわれに強いるから他律であるとしてしりぞけ，また合目的性も現象における自律を必然的に妨げるとしてしりぞける。

「それゆえ或る芸術作品の，もしくは或る行為の仕方の道徳的合目的性は，それらのものの美にはなんら貢献しないことになります。そして美がそれによって失われないためには，道徳的合目的性はむしろ隠されなければならないし，物の本性からまったく自由に，非強制的に発生するかのように見えなければなりません。」（S. 169f.）

「道徳性」ということでシラーが考えているのは理性規定，即ち実践理性が要求する自己規定のことである。これは極めて主観主義的なものである。これに対して美とは感性的なものの自己規定，即ち純粋な自然規定なのである。

3

普通道徳と芸術とは背反するものと考えることが現代においては常識となっている。即ち芸術は道徳的強制を受けてはならないし，これを拒否し

なければならないと考える芸術家は多いであろう。シラーの生きた当時のドイツの後進性，封建主義の中でシラーは何よりも強制ということをきらった。シラーが自由を語るとき，それは単なる通り一ぺんの言葉なのではない。それはシラーの魂の叫びなのである。ではシラーも道徳を美的でないと判決したのであろうか？シラーは言う。

「道徳的行為は，それがあたかもおのずからにして生ずる自然の結果であるかのように見えるとき，はじめて美的行為となるでしょう。一言にしていえば，自由な行為は，心情の自律と現象における自律とが相互に一致するときに，美わしい行為となるのです。」(S. 173)

明らかなようにシラーは道徳にも美を要求するのである。『人間の美的教育について』という書簡体の論文の中でシラーは人間の教育を芸術を通して行い，美的教育による道徳的完成を人間の目標とすべきことをといているが，この「カリアス書簡」でも同じことが述べられているのである。シラーは言う。

「一個の人間の性格の完全性の極致は道徳的美なのです。なぜならそれは，義務が自然となったときにおいてのみはじめて起こるからなのです。」(S. 173)

4

さてシラーの命題は「現象における自由は美と同一である。」というものであるが，この「自由」とは何かをもう少し検討してみよう。シラーは述べる。

「自由であること，己れ自らによって規定されていること，内から規定されていること，これらはいずれも一つのことであります。」(S. 175)

外から規定されていないということは，同時に内から規定されていること，即ち自由の表象である。さてこの内からの規定即ち自由の表象はどのようにして可能なのか。シラーは内からの規定の表象は必然的でなければ

ならないと考える。また対象の表象も外から規定されていないことの表象を必然的に伴わなければならない。だからそのためには，対象そのものが，自己の客観的性質によって，外からは規定されていないという対象の性質を注意させるようにわれわれを導くことが要求されよう。ここで悟性が登場する。即ち悟性に対象の形式について反省する機因が与えられなければならない。形式についてというのは，悟性は形式にだけ関係するからである。それゆえ対象は，規則を容れるような形式をもたなければならない。なぜなら悟性は自己の任務を，規則に従ってのみ遂行することができるからである。さて規則を暗示するところの形式は技術的 Kunstmäβig あるいは技巧的 technisch であるとシラーは言う。対象の技巧的形式が悟性を促して，規定されたものに対して規定するものを求めるようにさせる。それゆえ自由は技巧の助けによってはじめて，感性的に表現される。われわれが現象の王国において自由へ導かれるためには，技巧の表象が必要なのである。現象における自由は，美の根拠であるが，技巧はわれわれの自由の表象の必然的条件である。シラーは言う。

「美の根拠はつねに現象における自由である。われわれの美の表象の根拠は自由における技巧である。美および美の表象の二つの根本的条件を合一すると，次の表明がそれから生れます——美は技術性における自然である。」(S. 177)

この言説で分るように，シラーはまずはじめには「美」の根拠を求め，次に美の「表象」の根拠を求めたのである。そしてこの二つの合一としての命題をとらえるに至ったのである。

5

さて「美は技術性における自然である」というときの「自然」とは何か？それは「自由」と同じことなのか？シラーは言う。

「自然という言葉は，それが同時に美なるものの場を限定する感性的な

ものの分野を示しているという理由にもとずいて，すなわちそれが自由の概念を示すだけではなく，同時にまた感性界における自由の領域を示しているという理由にもとずいて，自由という言葉よりも，むしろ私には好ましいのです。技巧に対して言うならば，自然とは，それ自らによっているものです。技術 Kunst とは，規則によるところのものであり，技術性における自然とは，それ自らの規則によっているところのものです。」 (S. 177)

さらにシラーはつけ加えていう。

「それは物を，それと種類を異にする一切の他の物から区別する，いわば物の本質的個性ともいうべきものです。……自然という言葉で示される唯一のものは，そのものがそれによって規定的な物となるところのものなのです。」 (S. 177)

さて技巧とは自然なのか？それとも他律なのであろうか？この点に関してシラーは技巧を二つの観点から考察する。

「外的規定に対する関係からみれば，物の技巧的形式は自然です。しかし物の内的本質に対する関係からみれば，技巧的形式は再び或る外的なもの，あるいは他物です。」 (S. 180)

従って技巧が外的なものになる場合は，技巧が物自身から発生しない場合，また技巧が内から出てくるのではなくて，外から入ってくる場合，技巧が物にとって必然的でなく偶然的である場合なのである。ではこのように技巧が自然に対して他律となる場合，即ち技巧が自然にとって強制となる場合の自然とは何か？シラーは言う。

「それは或る物の存在の内的原理が，同時に物の形式の根拠として考えられるもの，すなわち形式の内的必然性です。――形式は，本来的には，自己規定的であると同時に，自ら規定されるものでなければなりません。単なる自律ではなくて，自己立法 Heautonomie が必要とされるのです。」 (S. 181)

結局技術性における自然，技巧における自律とは内的本質と形式との純粋な合致のことなのである。さて，自然・自己規定・自律および自己立法・自由および技術性などは諸対象の客観的性質であるとシラーは述べる。というのは，これらの諸性質は，たとえ表象する主観をまったく考慮の外におくとしても，なお対象に止まっているからである。シラーは言う。

「悟性による技巧と（すべての有機体におけるような）自然による技巧との間の区別は，理性的主観の存在とはまったく無関係です。かくしてこの区別は客観的であり，したがってそれに基づく技巧における自然の概念もまた客観的なのです。」（S. 182）

この言説においてシラーは自らの美学理論を主観主義から客観性をもつものに移そうと試みている。ここでシラーはカントが『判断力批判』の中で「自然はそれが芸術のように見えるとき美わしく，芸術はそれが自然のように見えるとき美わしい」と述べている命題は，技巧をもって自然美の本質的な須要物とし，自由をもって芸術美の本質的な条件としているということを表わしているのだと言って，さらに「芸術美はそれ自体すでに技巧の理念を，自然美は自由の理念を，含んでいるのですから，美は技巧における自然，すなわち，技術性における自由に他ならないということを，カント自身が承認していることになります。」（S. 183）と結論ずけている。

6

さてここでシラーは論をさらにすすめて，自由と技術性は同一の権利要求をもっているかのように思われるかも知れないが，技巧と自由は，美なるものに対して同一の関係はもっていないと述べる。

「自由だけが美なるものの根拠であって，技巧は単に，われわれの自由の表象の根拠であるにすぎません。……技巧は，それが自由の表象を呼び起こすことに役立つかぎりにおいてのみ，美に対して貢献するのです。」（S. 183）

だからシラーにとって重要なのは，自由であって技巧ではないということになる。美においてだけ，形式が内的本質によって規定されているからである。では美は無制限な自由のことなのであろうか？シラーはここで全体と個の問題を考えていう。

「あらゆる個々のものは自己意志をもとうとします。しかしもしすべてのものが，ただ自己自らのことだけを計るなら，全体の調和は一体どこにあるでしょうか。」（S.187）

全体の調和のことを考えるならば，個の無制限な自由ではなくて個に制限が加えられなければならない。シラーは言う。

「あらゆる偉大な構成においては，全体が効果をうるためには，個々のものが制限を受けるということは必要なことです。もしこの個々のものの制限が，同時にその自由の結果であるとするならば，換言すれば，このような限界を自己自らがおくならば，この構成は美わしい。美は自己自らによって統御される力であり，その力から生ずる制限なのです。」（S.187）

7

シラーは感性と理性のどちらを重視したであろうか？カントの影響を強く受けているシラーにとって，しばしば理性重視の言葉と受けとれるような発言が顔を出すが，シラーの好みとしては感性重視の方に強調のポイントがあったようにみられる。シラーは言っている。

「美わしい感性的世界は道徳的世界と同様に，もっとも幸福な象徴であるべきです。そして私の外にあるあらゆる美わしい自然物は，私に向って，『われのごとく自由であれ』と呼びかける幸福な保証人なのです。」（S.189）

「単に感情的な行為は，純粋に道徳的な行為よりも，しばしばより多くわれわれに満足を与えます。なぜならこのような行為は，自発性を示すからです。すなわち自然（感情）によって遂行されるのであって，自然の興

味に反して，命令的な理性によって，遂行されるのではないからです。」(S.190)

しかしシラーが道徳を軽視したと考えるのは行きすぎである。シラーは美を通しての道徳を強調したのである。シラーは言う。

「徳そのものは美によってのみ愛せられるべきものとなります。」(S.190)

8

芸術の美には二種あるとシラーは言う。

「(一)　選択または素材の美――自然美の模倣。

(二)　表現または形式の美――自然の模倣。

後者がなければ，芸術家は存在しません。この両者の合一は偉大な芸術家を作ります。」(S.191)

シラーはこの命題を若干説明して次のように述べる。

「選択の美にあっては，芸術家が何を表現するかということが注目され，形式の美（厳密にいえば芸術美）にあっては，芸術家がいかに表現するかということだけが注目されるのです。」(S.191)

単に美しいものを選び出すだけで十分なのではない。それを美しい表象にまで高めなければならない。ここに芸術家の役割がある。シラーは言う。

「形式または表現の美は，芸術にだけ特有なものです。……『理想美とは美しい物の美しい表象である。』」(S.191)

このように，表現するということが芸術家にとって本質的に重要なことなのであるが，では芸術家はいかに表現するのであろうか？

「自然的所産は，その技術性において自由に見える場合には美しい。――芸術的所産は，それが自然的所産を自由に表現する場合には美しい。」(S.191)

ここで表現の自由ということが問題になってくる。では表現されるとい

うことはどのようなことなのか？

「直観の能力は想像力です。それゆえ一つの対象は，その表象が直接に想像力の前にもたらされた場合，表現されるといわれるわけです。」（S. 191）

では自由に表現されるとはどういうことなのか？

「自己自らによって規定されている物，もしくはそのように見える物は自由である。」（S. 191）というのがシラーにとっての自由の命題なのであった。

「したがって或る対象は，それが想像力に対して，自己自らによって規定されているものとして，示される場合には，自由に表現されると言うのです。」（S. 191）

さてしかし対象は自らにおいてではなく，或る媒介物において表象される。すなわち芸術美は，自然そのものではなくて，或る媒介物における自然の模倣である，とシラーは考える。

「そしてこの媒介物は再び　a　彼自身の個性と自然とをもつ。　b　同様に一つの独自の自然として観られる芸術家に依存する。」（S. 192）

ここでシラーは相互に角逐する三様の自然が存在すると述べる。すなわち，表現される素材の自然，表現する素材の自然，この両者を合致させるべき芸術家の自然である。しかしわれわれが芸術所産において見出すことを期待するものは，模倣されるものの自然だけである。だから素材あるいは芸術家が自己の自然をそれに交じえるや否や，表現された対象は，もはや自己自身によって規定されたものとしては現われないで他律が現われる。それゆえ表現されたものの自然が，表現するものの自然から何物をも加えられない場合にかぎってだけ，或る対象は自由に表現されると言えるのだとシラーは述べている。

「したがって媒介者もしくは素材の自然は，模倣されるものの自然によって完全に征服されたかのように見えなければなりません。さてしかし，

模倣するものへ移されることのできるのは，単に模倣されるものの形式だけです。したがってそれは，芸術表現において素材を征服してしまわねばならぬところの形式なのです。」（S. 193）

「ですから，次のような場合に，表現は自由であるといわれるでしょう。……簡単に言えば――何物も素材によって規定されないで，すべてのものが形式によって規定されている場合です。」（S. 193）

だから絵画において芸術家の自然をあらわにするような絵は自己流 maniriert であるし，表現された対象の特殊性が，芸術家の精神の特殊性によって損われるならば，この表現は自己流である。シラーは言う。

「自己流 Manier の反対は様式 Stil です。様式とは，表現のあらゆる主観的な，またあらゆる客観的に偶然的な規定からのまったき独立性に他なりません。――表現の純粋客観性は善き様式の本質です。すなわち諸芸術の最高の原則です。

『様式は偶然的なものを越える，普遍的なものおよび必然的なものへの完全な高揚です。』」（S. 194）

以上述べてきたところを命題的に一言でいうと次のようになる。

「偉大な芸術家は，われわれに対象を示し（かれの表現は純粋客観性をもつ），凡庸の芸術家は自己自身を示し（かれの表現は主観性をもつ），劣等な芸術家は素材を示す（かれの表現は媒介物の自然および芸術家の分限によって規定される。）」（S. 194）

9

このカリアス簡書の最後でシラーは詩と言語の問題をとりあげ，これを少しく論じている。いうまでもなく詩人の媒介者は言語である。では言語とは何か？シラーは言語をどのように考えているであろうか？言葉は「種および類のための抽象的記号であって，個体のためのそれではありません。」（S. 195）「言語ならびにその変化結合の法則は，一人の個人に対し

てではなく，無限の個人に対して，記号として役立つまったく普遍的な物です。」（S.196）

詩人が表現したいものは個性的なものであるが，そのために詩人は，純粋に普遍的な記号の結合を用いなければならない。ここに矛盾がある。

「すなわち言語は，対象からその感性と個性とを奪います。そして対象に対しては，それにはまったく関係のないところの己れ自らの性質（普遍性）を押しつけます。言語は，感性的であるところの表現されるものの自然の中へ，抽象的であるところの表現するものの自然を混入します。すなわち対象の表現の中へ他律を導入するのです。」（S.196）

したがってこの場合対象は自己自身によって規定されたものとして表象されないが故に自由に表象されないで，単に記述されるにすぎななくる。ここに美は存在しない。これでは芸術にならないのである。

「それゆえもし，詩的表現が自由であるべき場合には，詩人は，言語の普遍的傾向を，

かれの技術の偉大さによって克服しなければならないのです。そして素材（言語とその変化および構成の法則）を形式（詳言すれば，形式の適用）によって征服しなければなりません。」（S.197）

さて美とはシラーによれば「現象における自由」なのであった。シラーは詩についてもこの立場を守って「一言にしていえば，詩的表現の美とは『言語の束縛のうちにおける，自然の自由な自己行為なのです。』」（S.197）と語る。そしてここでこのカリアス書簡は終っているのである。

10

シラーの生きた当時のドイツの歴史的環境は後進性そのものであった。統一ドイツ国家は成立して居らず，地方分権制と封建主義が支配的であった。このような環境の中で時代のエリートたちは目を現実からそむけ，観念の世界の構築に向けた。そして輝かしい観念の王国，精神の王国を樹立

したのであった。しかしこの現象は後世史家が批判的否定的に評した。すなわち，彼ら時代のエリートたちは観念の世界に逃避したのであると。彼らは物質世界に対決し，この中で理想を建設すべきであったのだと。19世紀後半から観念論哲学は打倒され，唯物論哲学が全盛となった。右は帝国主義，左は世界革命主義に走った。人類は物質世界の中で血みどろの闘争を続け，現代に至った。しかしこの道に未来はあるのであろうか？今や米ソ両陣営がこの狭い地球の支配権を求めてあらそっている。しかしどちらが勝ってもせいぜいこの地球一つを支配するに過ぎないのである。人類が大挙して大空のかなたの別の星々へ民族大移動をすることは，いかに自然科学が発達したとしても，考えられそうにない。人類は好むと好まざるとを問わず，この狭い地球の上で存続する以外道はないであろう。軍事的拡張主義に未来はない。われわれは視点の転換を計らなければならない。再び地上に観念の王国，精神の王国をうちたてなければならない。つまり21世紀は文化の時代にしなければならないのである。このためにわれわれは一度は否定したかつてのドイツの理念と精神の世界を再検討しなければならないであろう。人類は今や地球人となって地球世界を建設しなければならない。有限な物質世界から精神は自由に無限の高みへ飛翔しなければならないのである。シラー美学の検討もこの観点から考えられたのである。

〔注〕 本論引用文のテキストには，Friedrich Schiller dtv-Gesamtausgabe Band 17，を使用した。引用文末の数字はこのテキストのページ数を示す。なお引用文の訳文は，草薙正夫訳「美と芸術の理論——カリアス書簡——」岩波文庫を原則として使用した。

(1981年4月14日受理)

Schiller und Ästhetik

INOKAWA Kiyoshi

In Schillers Werken befinden sich die Briefe, die "Kallias oder über die Schönheit" heißen. Es sind die Briefe, die Schiller vom 25. Januar 1793 bis zum 28. Februar 1793 an seinen Freund Körner schrieb. Schiller entwickelt seine Theorien der Ästhetik in diesen Briefen. Sie sind nicht systematisch, aber darin sind Schillers Gedanken der Ästhetik ziemlich gedrängt dargestellt. In diesem Aufsatz versuche ich Schillers Theorien der Ästhetik so einheitlich wie möglich darzustellen.